

# 黄金の憧憬

幻想境界と禁書目録

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ブリテンに転生した人物がアルトリアに出会い英霊になるお話

# 目次

く 始まりの憧憬	1
く 始まりの憧憬	3
出会い	6
選択	9
師と弟子	9

## く始まりの憧憬 く始まりの憧憬

あの輝きを私は一生忘れないだろう、そして誰が何と言おうとあなたこそが私の憧れであり、光だったと。

燃える村、誰かの悲鳴、飛び散る赤、動かなくなる人だった物。ふと、どうして自分はこんなところにいるのだろうかと思いつ返す。

確か自分は現代日本にいる、どこにでもいる一般人だった気がする。それが気が付けば明らかに文明レベルが低い村で少女になって生きていた。

少しして自分が転生したのだと理解した。異世界か大昔かはわからないが、どうやら随分文明レベルが低い時代に転生したらしい、その上性別まで前世と違い、さらに転生した代償なのか前世の記憶は薄れてしまっていたが、それより大きな問題があつたため気にならなかった。

それというのも生の実感がなかったのである、転生なんて物をしたせいか一度死んでしまったせいかはわからないがどうも自分が生きているという実感がなく転生してからまるで死んだように生きてきた。おかげで村の人間どころか今世の實の親にすら気味悪るがられ村八文にされるしまつ。まあ仕方ない、ただでさえ文明レベルが低く生きるのもやつとな村なのだ排他的にもなる、そんな村でまったく笑わず、泣かず、無表情な子供など気味悪がられるに決まっている。むしろ捨てられたり、殺されたりしなかつた分良かったといえるだろう。両親も最低限の世話をしてくれたのと転生してから手にしたちよつとした能力のおかげで今日まで生きてこれた。

この世界に生まれて数年、生きているのか死んでいるのかわからなような現実感のないまま数年がすぎたある日のことだ。

村の端でただ意味もなく空を見上げていた時、唐突に村の反対側か

ら悲鳴のような声が聞こえてきた。悲鳴の数は時間を追うごとに増えていき加えて物騒な声も増えてゆく、どうやら盗賊か噂に聞く蛮族か何かが村を襲っているようである。

家々が火をつけられて燃える、知っている誰かが剣に切り裂かれ血を吹き倒れる、あつという間に転生してから続いてきた日常が地獄へと変わる。

そして蛮族が武器をもって自分に近づいてくる

そんな中であろうと自分はいまだにこの世界に現実味を感じられなかった。すぐそこに死が迫ってきているのに、今世の親が切り殺されたのに、すべてがまるで他人事のように感じられた。

蛮族が何かをしゃべっている、自分に向けて剣を振り上げている、それでもなお、命の危機ですら自分は何も感じられなかった。ただ「ああこのつまらない、何の意味も感じられない時も終わるのか」とそれだけしか感じられず、終わりの時を待つ。

「そこまでだ」

それはあまりにも鮮烈だった、その声を、その顔を、その剣を振るう姿を、私は一生忘れないだろう

突如現れた人物が蛮族が私に振り下ろした剣を切り払い返す刃で蛮族を切り裂く

そして黄金の剣を携えた騎士が私に振り返る

「ご安心をレディ私たちが来たからにはもう大丈夫です」

彼女は私を安心させようとそういった

この時から私の人生が色づき出した

これが私と彼女、アーサー王との出会いにして、私の運命、人生を決めた出会いだった。

## 出会い

黄金の剣を携えた騎士に続き、次々に騎士たちが村に入って来てからはあつという間だった。蛮族たちは瞬く間に騎士たちにより倒されていき、村を襲っていた蛮族は、ほんの数分で騎士たちに制圧された。

「状況はどうですかガウエイン卿」

村の蛮族をすべて撃退し逃げた残党も狩り終わり、襲われた村の状況を見て回ってきたガウエイン卿に問う

「は、残党はすべて狩り終わりました。：ただ村の状況は思わしくありません、村の住人で生き残った者は3割以下かと」

その言葉にわたしは無意識に手を強く握りしめ、自身の無力さを痛感する。

(我々がもつと早く・・・もつと早く村にたどり着いていれば)

否、奴ら蛮族は、ゲリラのように行動している以上、すべての襲撃に対応するのは現在のブリテンの騎士団のみでは無理があり、こうした小さな村まですべて守るのは、ムリがあるのは分かっている。今回とてたまたま我らが近くを通ったゆえ奴らの襲撃にきずくことができたのだ。しかしそれでも、こうして救えなかったものの存在を見ると、どうしてもかんがえてしまう。

「了解した。ガウエイン卿は生き残った村人を集めよ」

私の指示に従いガウエイン卿が村人を集めに行く、ここまでの被害を受けた以上、残った村人だけでここに残り生活するのは無理であろう、おそらく別の集落と合流してもらうことになる、親や兄弟、友を失ったばかりの村人にはこくであるが我々もいつまでもここにいないわけにはいかない、急ぎ村人を集め移動しなくては

こんな状況を前にしても合理的に思考する頭がいやになるがこれも王としての務め、せめてこんな事が起きるのをなくす為に一刻も早くヴォーティガーンをうち倒しブリテン島を平和にしなければ。

そんなことを考えているとふと一人の少女が近づいてくる・・・

黄金の剣を携えた騎士が現れ私を救ってから気が付けば蛮族たちがいなくなり周りは騎士たちと村人だけになっていた、その間、私がないをしていたかという、ずっと黄金の剣をもつ金砂の髪の騎士のことを考えていた。

あんなことは転生し、この世界に生まれてから初めてだった、あんなに心が動き、何かを思ったのは。今も彼・彼女を見ているだけで心が早鐘をうち、今まであんなにつまらなく見えていたモノクロの様な世界が、彼・彼女が目映るだけで色づいて見えるように感じる

なんだこれは、なんだこれは、このように心が動くのは前世以来でとまどってしまう。

わからない、わからない、ただ彼・彼女を見つめてしまう、その整った目鼻立ち、凜とした力強いまるで宝石のような緑の瞳、戦場であろうとなお美しい金砂の髪、凜とした立ち振る舞い、そのすべてに心が動かされる。それに何故か記憶のおくで既視感を感じる

そうして私が混乱していると騎士が村人を集め始めた、あの人と話すなら今がチャンスだ、今あの人の中には誰もいない、このままだとあの人と話す機会がなくなってしまうかもしれない、今まで無気力に意味もなくそれこそ死んだように生きてきたが初めて心動くことに出会えた、彼女に助けられた瞬間たしかに私は生を実感できたのだ、この心動かす情動がなにかは分からないが、今あの人に話しかけなければ一生後悔する。

「あ、ああの」

そうするとあの人が振り返る

「どうかしましたか、レディ」

「さっ、さきは助けてくれてありがとう」

「いえ、当然のことでしたまでです」

「.....」

どうしようなにかなにか言わなきゃ、咄嗟に話しかけたのでなにを話せばいいかかんがえてなかった。なにをいえば（結婚してください

とか、・・・いやおかしいでしょ）（好きなものはとか・・・それもおかしい） そうだ

「なつなまえを教えてください」

すると彼女は少し驚いた顔をする、よく考えるとこんなに状況で急に名前きくのはおかしかったのかな。だがすぐに彼女はウマから降り私に目線を合わせて返事を返してくれた

「私の名前はアーサー、レディあなたの名前を聞いても？」

「わたしはアーチャー、アーチャーです」

わたしは笑顔でそう答えた



## 選択

アーサーその名を私は確かに知っている、誉れ高き騎士たちの王、円卓の騎士達を率いてブリテンを治めた王、アーサー王伝説に語られるいずれ甦るイングランドの王である。

彼女はその名をかたった。そして彼女の姿、何故か既視感を覚えたその姿を私は確かに知っていた、その理由は彼女が私が前世で好きだった作品、f ■ t eの登場人物にそっくりだったからである。

つまり私が転生したのは、f a ■ eの世界の神秘・幻想ある最後の島、ブリテン島であり、時代は、ちょうどアーサー王が活躍する時代そのものだったというわけである。

その後、私たちは生き残った村人は、アーサー王率いる騎士たちに護衛され別の大きな村へと連れられた、これからは、ここで過ごせということらしかった。

突然色々なことがあり混乱していた私の頭も時間がたったことでひとまず落ち着き整理することができた。この世界がどういう世界か、私はこれからどう生きたいのか、そう今まで無意味に生きてきた私にも目標が、生きる理由が見つかった、私はアーサー王に救われた、ならば、アーサー王に救われた命の恩を返すべきだ、いや返したい私自身がそう思った、そして私もいつかは彼女のように・・・わたしはこの世界に生まれて初めて自分から何かをしたいと思った。

ならばどうやって彼女に恩を返すのかを考えなければならぬわけだが、その方法はうかんんでいる、私もアーサー王に従う騎士たちの様に騎士となり彼女のために戦いたい、ただの小娘が、生きていくだけでも一人でできないような物がなにを言っているのかと思うだろうだが、私は決めたのだそのためだったらなんだったってして見せる、それに何となくが出来そうな気がするのだ。

しかし、そうすると今の状況はまずい、もうすぐアーサー王たちはここを去る、そして何のつてもない小娘が騎士になるのは非常に難しい、否、ほぼ不可能なはずだ。わたしは今や身寄りのない少女でありこのまま新しい村にはいれば、一生農作業をして過ごすことになりかね

ない。だが誰か騎士の者の庇護下に入れればチャンスができるかもしれない。いまが唯一のチャンスなのだアーサー王や円卓の騎士たちにかかわれる今こそが唯一の

それに私の中の何かがここで行動するのが「正解」だと訴えている

村人の移住の護衛も終わり生き残った村人を移動させ、移動先の村への説明なども終えた、残念だが我々にできるのもここまでだ、それにだいぶ本来の予定より時間をかけてしまった、はやく次の目的地に向かわねば

「ねー、アーサーまだ終わらないのかーい」

すると馬車からマーリンのせかさ声が聞こえる

「マーリン、せかさずとも、もうすぐ出発します」

「ならいいんだけどねーボクはもう待ちくたびれたよ」

まったくマーリンには困ったものだ我が師であり、優秀な魔術師でもあるのだがどうもかつてが過ぎるといふか。そんなことを思っていると一人の少女が駆け寄ってきた、その少女は村で助けた少女であり、私に話しかけてきた少女であった、何かあったのだろうか

「あの、アーサー王さま」

「どうかしたのですかレディ」

「わたしを騎士にしてくれませんか」

少女の放った言葉に私も周りの騎士たちも目を見開き驚く、はじめはただのたわごとかと思ったが少女のその目は本気だった。

「レディ、なぜそんなことをおっしゃられるのですか」

ガウエイン卿が少女に問う、当然だ少女がいきなり本気でそんなことを言い始めたなら、みな聞き返すだろう

「わたしはアーサー王様に命を救われました、その御恩を返したいのです、そしてわたしもアーサー王様や騎士の皆さんのように強くなりたいのです」

「レディあなたはそんなことをせずとも好いのです。あなたのような少女は花と戯れ健やかに過ごされて下さればそれだけでよいのです、戦などの血なまぐさい行いは我ら騎士の仕事、何よりご両親が心配されましよう」

ガウエイン卿がそう言う、そうだ彼女のような少女を助けるのは我ら騎士にとつて当然の事であり、恩に思う必要などないのだ、それでも返したいと願ってくれるなら、彼らが健やかに過ごしてくれることこそ我ら騎士の本望

「父と母はこたびの件でなくなりました、どうか私を騎士にしてください」

その言葉にガウエイン卿を含め皆が顔を歪め言葉が出なくなる、そんな静まった空気の中、軽薄な声が聞こえてくる

「へく、その子面白そうじゃないか、なんだったら僕が面倒を見てあげようかい」

「なっ、いったいどういうつもりですかマーリン」

マーリンが軽薄な態度で馬車から出てきました、いったいなにを言っているのだこの男は、周りの騎士たちとともにマーリンをにらんでしまう、いったいなにをするつもりだ

「怖い顔しないでおくれよ、どういうつもりってそのままの意味さ、ボクがその子を育ててあげようって話さ、何やら面白そうな中身をしているようだからね、で、どうだい」

「ふざけないでくださいマー」ぜひお願いします」

「じゃ決まりだね、これからよろしくね」

そういうとマーリンはにやりと笑った

## 師と弟子

ふざけんな！クソマーリン

失礼、取り乱してしまいました。あの日、アーサー王に救われ騎士して欲しいと頼み、何故かマーリンに興味を持たれた私は、彼らと共に現在のアーサー王の居城であるコーンウォールのティンタジェル城に連れられそこで暮らす事となりました。

どうやらまだブリテンにはキャメロット城はなく現在のブリテンはアーサー王が平定する前、卑王ヴォーティガンが倒される以前の様です。私はティンタジェルの下町でマーリンに育てられることとなりました、アーサー王や騎士たちは何度も反対されていましたが、これが騎士になるための唯一の道だったので彼らには悪いですが譲るつもりはありませんでした。

それでティンタジェルでの生活ですがアーサー王たちにはその後会えていません。まあこれは仕方ありません彼らも大変忙しい身です、たかがマーリンに拾われただけの村娘かまっている暇などないでしょう。私も騎士になるためにティンタジェルに来たわけですし、ただマーリンあなたはダメです。

私は一応マーリンに育てられることとなったはずですが、そのマーリンときたら、ティンタジェル来て私に家を用意し金を与えたあとまったく音沙汰がありません、あなたも忙しい身でしょうが、年齢10歳にもなっていない小娘を一人で数か月放置とはいったいどういう神経をしているのでしょうか、わたしを疎んでいた今世の親ですらまだましでしたよ、ティンタジェルの治安が良かったことと、私が特殊な身の上の少女であったことがなければどうなっていたことやら、原作でもクソ野郎だといわれていましたが、実際にあってもクソ野郎でした。アーサー王と同じ相手に指示できると一人盛り上がっていた自分がバカみたいです。

そんなマーリンですが、今朝急に連絡があり今日会いに来るそうです。どうやら完全に忘れ去られていたわけではないようで一先ず一安心といったところです。

「やあ、アーチャー久しぶりだね、元気にしていたかい」

おっと噂話をしていたら、ようやく本人が来たようだ

「お久しぶりです。マーリン様」

「ハハハ、そんなにかしこまらなくていいよ、僕の事は気軽にマーリンお兄さんでも呼んでくれればいいよ」

この野郎、殴りたい、いったいどれだけ放置してたと思っている、つい数か月前まで感情と呼べるものがなかった私ですら怒りを覚える笑顔だ。だが落ち着け私、こいつはクズでも私の保護者であり後見人だこいつには私を騎士にしてもらわなければならぬ。

「では、マーリンと呼ばせていただきます。」

「何かとげを感じるような、まあいいとしよう。それで君を騎士に育てるとい話だけでも」

「はいなんでしょう」

「おっと、すごい反応だ」

当然である、待たされて数か月、そのために私はここに来たのだから。

「基本的には夢の中で君を鍛えることになる」

「夢の中ですか」

「ボクもこう見えて、忙しい身でね、残念だけど、君の事ばかり見てあげられないんだ」

それはわかる、こいつはこれでもアーサー王の師であり、相談役のような存在だ、私のような存在にそうそう時間を取れないだろう、むしろなぜ私を育てることを引き受けたのがわからないくらいである

「だから、夢の中で君に騎士となるために必要なことを教えよう。ボクは夢魔だからね人の夢の中に入ることができなんだ」

そういえばこいつそんな事が出来るのだったな、たしかアーサー王を鍛える時もそんなことをしていたのだったか

「わかりました、鍛えてくれるならそれで構いません」

「ああ、たまには夢だけじゃなく現実でも見てあげるから、安心してくられても大丈夫さ」

となると剣の振り方などを夢の中でならい、それを現実で自分で復

習するといった感じになるのか、体は自分で鍛えなければ。

わたしは自分の体を見下ろす、ただの少女の体だ、わたしは本当に騎士になれるのだろうか、アーサー王も女性だが彼女は王になるためにデザインされた存在だ、強大な魔力を生まれつき持って生まれている、この fate の世界では女性の英雄も多いことは知っている、だが自分は前世の記憶があるのと妙な直感があるが、生まれ自体は一般人の親から生まれた存在だ。英雄になれるだけの能力があるのかはわからない。そう思うと少し不安になる

「大丈夫さ、ボクが見たところ君には才能があるよ」

わたしがそんなことを考えているとそれを読まれたのか、マーリンがそんなことを言う

そうだわたしは騎士になるのだ出来るできないではなく、なるのだとえ才能があるうがなろうが、彼女のようになりたいと、彼女に恩を返し、ともに戦いたいと、そう決めたはずだ。

わたしは改めて自分にいい聞かせる。

「はい、ありがとうございます、これからご指導よろしくお願ひします。」

「ああもちろん、任せてくれたまえ」

「これからご指導よろしくお願ひします。」

フッフ、たまたま立ち寄った村で面白い拾い物をした、不思議な魂、おそらくこの世のものではない魂を宿した少女。彼女はどんな物語をボクに見せてくれるのかな。これからが楽しみだ。